＜資料紹介＞

加曽利貝塚博物館所蔵の千葉市宇那谷町（内野第１遺跡）出土土製品３例

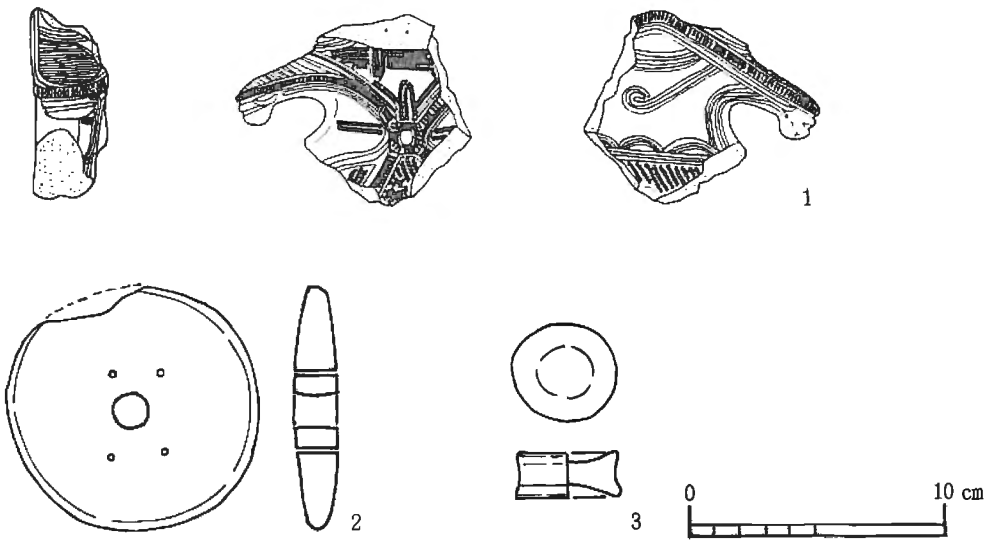
田　中　英　世

１．はじめに

加曽利貝塚博物館に千葉市宇那谷町出土とされる土偶・有孔土製円盤・耳飾各１点が展示されている。これらは昭和50年頃に地元中学生により採集されたもので、採集地は宇那谷遺跡と呼称されてきたが、平成元年から発掘調査が行なわれている内野第１遺跡に相当する（註１）。発掘調査は現在も継続中であるが、これらの展示品は遺跡の重要性を充分に物語っており、ここに紹介する。また発掘調査で出土した土偶の一部を関連資料として掲載したが、これらは平成３年３月行なわれた千葉市遺跡発表会および加曽利貝塚博物館において行なわれた郷土史講座の一環として展示・公開したもので、今回掲載したものの他に残存状態の良好な７個体を『千葉市文化財調査協会年報５　－平成３年度－』に掲載予定である。

２．遺物の概略（第１図）

土偶（第１図１）　木菟土偶の胴部上半部分である。背面で山形をなす細沈線を施した隆帯は、前面で腕を経て臍の部分でＸ字状に交叉して脚部に移行する。前面では結節沈線文が顎の



第１図　宇那谷町採集土製品（加曽利貝塚博物館蔵）

下に３列と隆帯に沿って１列、中央部に横２列、更に臍の上部に正中線を表わすと思われる逆Ｕ字状に１列施されている。乳部は縦長の隆帯により表現され、その上にも刺突が施されている。背面は隆帯に沿って２本、脇のカーブに沿って３本の沈線が施される他、中央部に渦状に２本と胴部との境に波状に２本の沈線を施し、胴部下半はＲＬの縄文を施文する。また腕部上面には緻密な沈線が施されている。

有孔土製円板（第１図２）－一部欠損しているがほぼ完形で、直径9.9㎝、厚1.5㎝、中心孔1,4㎝を測り、中心孔から1.5㎝離れた部分に２個１対の小孔が存在する。他遺跡の類例を見ても完形品は少なく優品である。有孔土製円板については鷹野光行氏や喜多圭介氏の集成（鷹野　1977・1978・喜多　1978）や紡錘車と考察する長崎元広氏の論考（長崎　1978）がある。発掘調査では、10点出土しているが、古墳時代前期の土器を再利用したと思われるものも２点出土している。

耳飾（第１図３）－臼形耳飾で、径4.2㎝、厚1.8㎝を測り、文様は施されていない。発掘調査では、10点出土している。

第２図　宇那谷町内野第１遺跡位置図（１／2500）

3．遺跡の概略

遺跡は千葉市の北部に位置し、北上して印旛沼に注ぐ勝田川の西岸、標高15～25ｍの河岸段丘上に位置する。遺跡の範囲は約10万㎡に亘ると思われ、現在まで約40％の本調査が終了している。検出された遺構としては縄文時代中期後半から晩期前半の住居跡60軒・古墳時代前期の住居跡170軒・古墳４基であり、ここでは縄文時代の遺構を中心として述べる。なお調査地点により、東側部分をＡ地点（第２図星印）、南側をＢ地点、北側部分をＣ地点（年報５参照）とする。今回紹介した土偶はＡ地点から採集されたものと思われる。

Ａ地点－遺構・遺物が最も集中する地点で、中央部を境に東側は後期から晩期の遺物を多量に包含する黒色土が厚く堆積しており、黒色土中から住居跡３軒の他に多数の炉跡状遺構やピットが検出されている他、人骨１体と獣骨集中区が発見されている。第125号住居跡は覆土内に焼土層が厚く堆積しており、双口異形土器と耳飾および石棒と砕けた石剣が出土しており、祭祀的色彩が強く感じられる遺構である（註２）。西側部分は開田工事によりローム層まで削平を受けているが、20軒以上の住居跡が検出され、この境部分に晩期中葉の浅い窪地が北から南へ向かって存在する。Ａ地点からは多量の土器の他に石剣・石棒・土偶・土版・岩版・有孔土製円板が出土しているが、そのほとんどが中央部の晩期の窪地と東側の包含層からの出土である。

Ｂ地点－Ａ地点の西側部分に続く地点で、堀ノ内式期～安行Ⅱ式期の住居跡20軒が検出されている。第55号住居跡は１辺が10ｍの方形の住居跡で、鹿角を伴うハマグリを主体とした貝ブロックが検出された他、２個の小形臼形耳飾が埋葬状態を示すような状況で出土した。試掘によれば遺構は更に南側に広がり晩期の住居跡も確認されている（千葉市文化財調査協会1992）。

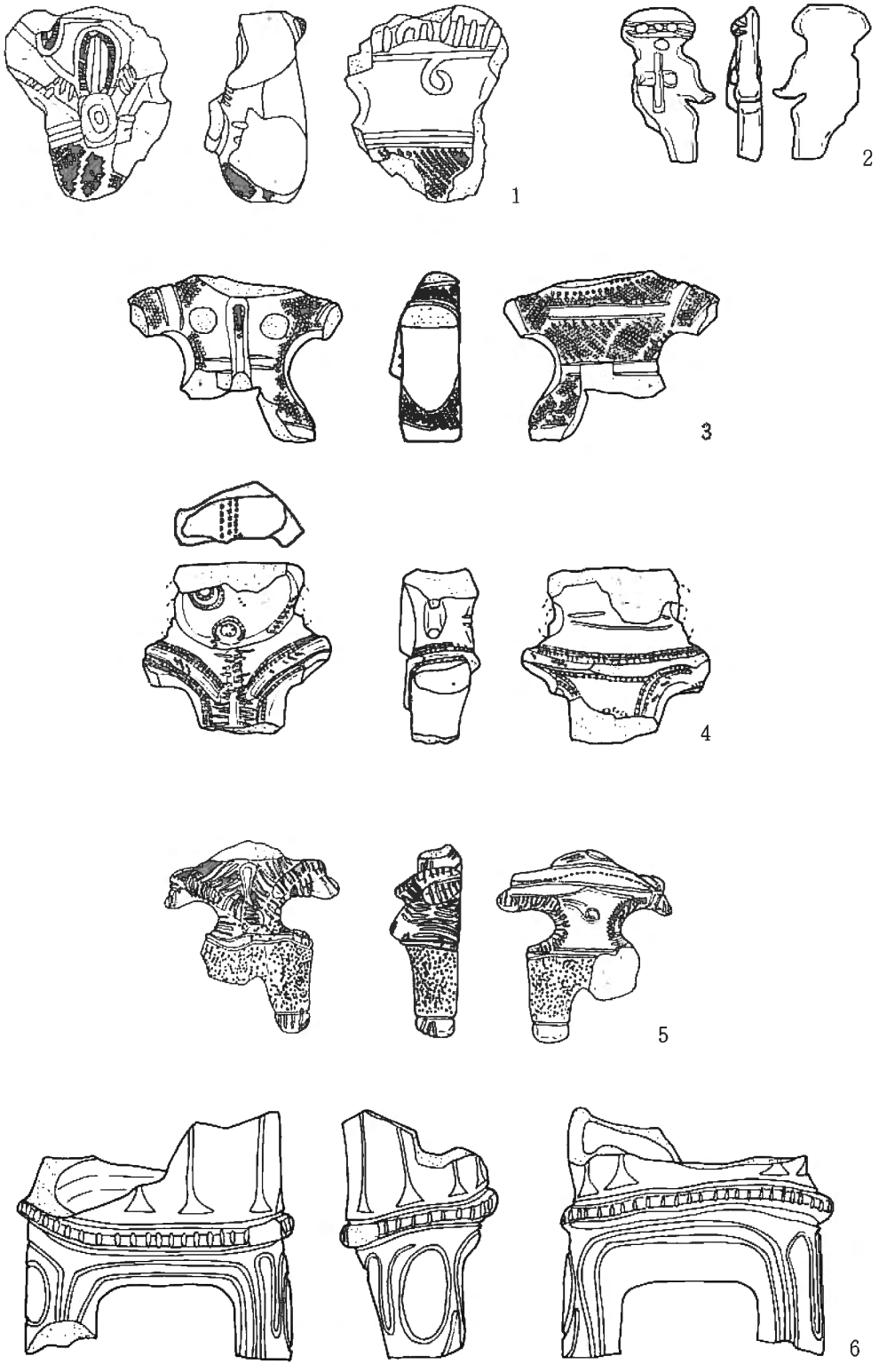
Ｃ地点－北側の広い部分であるが、加曽利ＥⅢ式期～ＥⅣ式期の住居跡６軒が検出されているに過ぎず、浮島式土器の出土が若干みられる。

以上が内野第１遺跡の概略であるが、昭和48年度の分布調査により佐賀利南遺跡とされたものがＡ・Ｂ地点で、梨木山南遺跡とされたものがＣ地点である。

4．内野第１遺跡の土偶について

今回紹介した土偶を特徴付けるものはＸ字状の隆帯と結節沈線文である。この隆帯に注目して土偶の変遷を追ったものに、川崎純徳・鈴木正博両氏の論考（川崎　1985・鈴木　1989）があり、更に上野修一氏による後藤遺跡の土偶研究（上野　1989・1991）を基にして内野第１遺跡の土偶を分析してみたい。

今回紹介した土偶に関連するものとして、上高井貝塚出土例、真福寺貝塚出土例、余山貝塚出土例があげられる。上高井貝塚出土例はＸ字状の隆帯がみられるが、その結合部は臍より上



第３図　宇那谷町内野第１遺跡出土土偶

部にあり、臍の部分は軽く脹らんで正中線は棒状の隆帯により表わされ、山形土偶との関連を示している。真福寺貝塚出土例は前面に刺突と沈線を加えたV字状の隆帯がみられるが、これらが背面では2本の平行沈線間に刺突を加えるものとなっている。正中線は逆U字状の隆帯で表わされ、これを中心として肋骨文が施され、肩部には短沈線が加えられる。余山貝塚出土例は「千葉県の土偶」(堀越　1980)に野口義磨氏提供とされた写真の土偶で、胴部上半のみであるが背面には内野第1遺跡出土例と同様の細沈線を加えた山形の隆帯がみられるが、これが前面にきて胸の部分で途切れる。正中線は棒状の隆帯であるが両脇および隆帯上に刺突文を伴なう。前面は肋骨文、背面は太い沈線により文様が描出される。以上のように内野第1遺跡出土例と真福寺貝塚出土例及び余山貝塚出土例には隆帯と沈線や結節沈線という施文方法は異なるものの、文様モチーフが共通している部分が認められる。背面の細沈線を施した隆帯や正中線および首の部分と胴部中央部の結節文や肩の部分の沈線文など、真福寺貝塚出土例は沈線により抽出されているが内野第1遺跡出土例との類似が指摘できる(註3)。上高井貝塚出土例は安行1式期に、真福寺貝塚出土例・余山貝塚出土例は安行2式期に比定され、今回紹介した土偶も安行2式期のものと思われる。更に発掘調査により関連する土偶が1点出土している(第3図1)。残存状態は悪いが、前面のV字状の隆帯上は細沈線から太沈線に変化し、正中線の逆U字状のモチーフは同じであるが結節沈線文から細沈線を加えた隆帯に変化する。背面も太い沈線で渦文が施される他、上部に縦位截痕を有する瘤が2個認められ安行3a式期のものと思われる(証4)。

以上、千葉市宇那谷町から採集された土偶について述べてきた。第3図1～6は内野第1遺跡の発掘調査により出土した土偶である。詳細は出土地点を再検討して述べるつもりであるが、2は曽谷式期前後の土偶、4・5は安行1式期から安行2式期にかけての土偶で、特に5の隆帯および臍の描出は上高井貝塚出土例と共通とする。6は胴部中央にI字文を有する中空土偶で西広貝塚(米田　1977)に類例が求められる。また年報5に掲載したほぼ完形の山形土偶は、顔面の文様がほとんど沈線により描出され、後頭部の結髪状突起が消滅しているなど山形土偶最終末に位置付けられるものである(註5)。今回抽出したものは発掘調査時に残存度の良好なものを掲載したものである。年報5に掲載したものを含めても中心をなすものは加曽利BIII式期から安行I式期の山形土偶から木菟土偶への移行期のものが中心をなし、第1図で紹介したような安行II式期のものは意外と少ないようである。今後、発掘調査及び整理の進展に伴ない土偶の出土点数も百点以上になると思われるが、これらについては出土状態等を含めて改めて検討すべきものである。

5．ま と め

内野第1遺跡の発掘調査は現在も進行中であるが、A地点出土の膨大な遺物を前にして唖然

とする日々であり、発掘調査に追われ、個々の遺物に対しも目が届かないのが現状である。今でも土地改良工事により水田下から遺物が出土したとの情報は良く耳にするが、A地点のような水田下の遺跡や低地性の遺跡は、近年埼玉県でも寿能遺跡や赤城遺跡等数多く調査され、従来検出されなかった木製品や多量の自然遺物を出土しており、今後注意を払う必要がある（原田　1985・1987）。土偶については、現在国立歴史民族博物館を中心として、全国規模の集成が行われつつある。内野第1遺跡の土偶についても、その出土状態等を検討した上で改めて報告を行いたい。なおこれらの土偶については、阿部芳郎・飯塚博和・上野修一・柿沼修一・田川良・堀越正行・渡辺修一・朝比奈竹男・川端弘士の各氏に現地において種々の御教示を賜った他、加曽利貝塚博物館・青沼道文・佐藤順一の各氏には日頃から多くの協力と資料の実測および文献の探索に御協力頂いた。また年報5を含めた土偶の実測は明治大学生阿部伸一郎君によるものである。

（㈶千葉市文化財調査協会）

註1　昭和51年に刊行された『千葉市史史料編1』（千葉市　1976）の地名表には宇那谷遺跡（内山遺跡）とされている。しかし、地名表の基礎となった昭和48年の分布調査では、梨木山・梨木山南・佐賀利南と地点別に呼称されており（千葉市教育委員会　1984）、今回紹介した資料が採集されたのは佐賀利南とされた地点と思われる。現在この3地点を含めて内野第1遺跡として発掘調査を行っている。また『千葉県の土偶』（堀越　1980）の中においても宇那谷遺跡として記載されている。著者も土偶を実見した後に踏査を行なったが、低地部分の佐賀利南には特に注意もしなかった記憶がある。

註2　第125号住居跡においては土偶の出土は認めらなかった。双口異形土器および石剣については火を供なう祭祀的色彩を強く示す出土例が多いようである（内田　1985・小野1985）。しかしこれに土偶が関与する例は極めて少ないようである。双口異形土器と石剣が供なう例としては曽谷貝塚D4号住居跡（堀越　1977）があげられ、土偶と石剣が供なう例としては千代田遺跡8号住居跡（八幡他　1972）があげられる。いずれも焼土層の存在が指摘されている。

註3　今回紹介した土偶と余山貝塚出土例の大きな違いは、前面に施された結節沈線文と正中線の描出であるが、余山貝塚出土例の正中線においてみられた刺突文に注目すれば共通したモチーフとなる。余山貝塚出土例と真福寺貝塚出土例の乳房は円板貼付文により表現されており、川崎純徳氏は安行2a式土器の精製土器の中に共通のものが認められるとしている。両者は脇骨文の存在などをみても多くの点で類似している。

註4　隆帯上の細沈線から太沈線の変化や縦位截痕のある瘤文については、鈴木正博氏の中妻貝塚の分析の中に詳細に述べられている（鈴木　1981）。

註5　この土偶の特徴としては、眉をはじめとして顔面文様が沈線で描出されること、後頭部

の突起が消滅していること、正中線が認められず臍が大きく突き出している点にあげられる。胴部中央部の文様については、上野氏が後藤遺跡の土偶分析の中で椎塚出土例をあげて分析を行なっている。後藤遺跡の沈線文様とあわせても、加曽利ＢⅢ式期～曽谷式期に伴なうものと思われる。また年報 5－4 は福田貝塚出土例に代表される顔面を省略した土偶である。

参考文献

上野健一　1989・1991　「北関東における後・晩期の土偶変遷について（上）・（下）」『栃木県立博物館紀要』第6号・第8号

内田義久　1985・1986　「異形台付土器用途考（上）・（下）」『奈和』第23号・第24号

小野美代子 1981　「加曽利Ｂ式期の土偶について」『土曜考古』4

川崎純徳　1985　「安行式土偶に関する覚がき（1）」『常総台地』13

瓦吹　堅　1990　「山形土偶」『季刊考古学』第30号　雄山閣

喜田圭介　1987　「有孔円板形土製品小考（Ⅱ）」『竹箆』第3号　北総たけべらの会

後藤和民他 1982　「昭和48年度加曽利貝塚東傾斜面第5次発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』8号　市立加曽利貝塚博物館

鈴木敏昭　1989　「沈黙する女神－土偶研究のゆくえ－」『埼玉県立博物館紀要』16

鈴木正博　1989　「安行式土偶研究の基礎」『古代』第87号

鈴木正博他 1981　『取手と先史文化（下巻）－中妻貝塚の研究－』　取手市教育委員会

鷹野光行　1977　「有孔円板形土製品についての一考察」『西広貝塚』　上総国分寺台遺跡調査団

1980　「有孔円板形土製品」『伊知波良』4

千葉市　1976　『千葉市史　史料編Ⅰ－原始・古代・中世』

千葉市教育委員会　1984　『千葉市埋蔵文化財分布地図〈改訂版〉』

千葉市文化財調査協会　1992　『千葉市文化財調査協会年報4 －平成2年度－』

常総台地研究会　1972　『土偶・土版・岩偶・岩版・資料（その1）』

長崎元広　1985　「縄文時代の紡錘車」『長野県考古学会誌』32

新津　健　1985　「石剣考」『研究紀要』2　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

原田昌幸　1984　「成田市殿台遺跡出土の土偶」『奈和』第22号

原田昌幸他 1985　「印旛沼周辺における低地遺跡の研究」『奈和』23号

1987　「印旛沼周辺低地出土の新資料」『竹箆』第3号　北総たけべらの会

堀越正行　1977　『曽谷貝塚Ｄ地点発掘調査概報』　市川市教育委員会

1980　『千葉県の土偶』　市立市川博物館
1992　「千葉県の土偶」『国立歴史民族博物館研究報告』第37集
水戸市立博物館　1985　『土偶 －縄文人の祈り－ 』
八幡一郎他 1972　『千代田遺跡』　四街道千代田遺跡調査会
山崎和巳　1990　「みみずく土偶」『季刊考古学』第30号　雄山閣
米田耕之助他　1977　『西広貝塚』　上総国分寺台遺跡調査団